

北海道における新生児・乳児の在宅療法に関する研究

— 後障害児の継続医療について —

(新生児・乳児期の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 萩 沢 正 博

要 約：北海道における後障害児の退院後の継続医療の現況についてアンケート調査を行った。

後障害児は、退院後の再入院例が多く、医療機関への受診回数も多く（退院後1年目では、月平均3.8回）、訓練施設への通園例も高率（82.4%）であり、養育者（主に母親）の多忙さが示唆された。しかしながら、後障害児の福祉制度との関係では、手当・手帳などを受けている者が調査対象者の62.2%と極めて低く、後障害児の継続医療においては、児を抱えた母親への精神的な支援は言うまでもなく、物理的な負担の軽減も重要であると考えられた。

目的・対象・方法：北海道における後障害児の継続医療の現況を把握するために、昭和62.1.1以降出生し、道内の各地域での中心的新生児医療施設（14施設）に新生児期に入院となり、退院後1年以上外来にてフォローアップ可能であった例の中で、後障害を有した児 209例に対して、その養育者にアンケート調査を行った。後障害は、視聴力障害、運動障害、知能障害にて日常生活に重大な影響を及ぼすものとした。

結 果：アンケートの回収率は、56.9%（119/209）であり、119例（成熟児 50例、低出生体重児 69例）の内訳は、脳性麻痺 74例、精神発達遅延 76例、てんかん 33例、盲・強度の弱視 8例、難聴 6例であった。後障害児の平均年

令、平均妊娠週数、平均出生体重は、それぞれ、2.7歳、34.3週、2090gであった。

後障害児の退院後の状況では、退院後の再入院例が1人平均2.8回、医療機関への受診回数も退院後1年目では、月平均3.8回と多く、訓練施設への通園例も高率（82.4%）を示したが、母親の有職率（パートも含む）は、8.4%（10/119）と低く、母親の多忙さがうかがわれた。また、後障害児の社会福祉制度との関係では、手当・手帳などを受給していない例が、全体の37.8%もみられた。

考 察：後障害児の継続医療においては、児を抱えた養育者（主に母親）への精神的な支援は言うまでもなく、物理的（時間、経済的）な担

の軽減も重要であると考えられた。

共同研究施設 市立札幌病院未熟児センター
道立小児センター NICU
北大病院分娩部
天使病院 NICU
苫小牧王子病院小児科
室蘭日鋼記念病院小児科
旭川医大小児科

旭川厚生病院小児科
北見日赤病院小児科
稚内市立病院小児科
帯広厚生病院小児科
帯広協会病院小児科
釧路日赤病院小児科
函館中央病院未熟児病棟

後障害児の退院後の状況

退院後の入院回数	退院後の医療機関・訓練施設 への受診回数 (退院後1年目)	母親の有職率 (パートも含む)	訓練施設への 通園率
----------	-------------------------------------	--------------------	---------------

2.8 ± 2.9 回 (0~17)	3.8 ± 3.4 回/月 (0~20)	10 / 119 (8.4%)	98 / 119 (82.4%)
-----------------------	-------------------------	--------------------	---------------------

後障害児と社会福祉制度

障害児福祉手当	特別児童扶養手当	身体障害者手帳	療育手帳	いずれも
(+)	(+)	(+)	(+)	(-)
33 (27.7%)	51 (42.9%)	56 (47.1%)	14 (11.8%)	45 (37.8%)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:北海道における後障害児の退院後の継続医療の現況についてアンケート調査を行った。後障害児は、退院後の再入院例が多く、医療機関への受診回数も多く(退院後1年目では、月平均3.8回)、訓練施設への通園例も高率(82.4%)であり、養育者(主に母親)の多忙さが示唆された。しかしながら、後障害児の福祉制度との関係では、手当・手帳などを受けている者が調査対象者の62.2%と極めて低く、後障害児の継続医療においては、児を抱えた母親への精神的な支援は言うまでもなく、物理的な負担の軽減も重要であると考えられた。